

日蓮大聖人御書全集

いたいどうしんじ

異体同心事

新版
2054
〜
2055

いたいどうしんじ

異体同心事

しろこそでひと

厚 綿

こそで

伯 耆 ぼう

便 宜

がもく

白小袖一つ・あつわたの小袖、はわき房のびんぎに鵝目

いっかん

承

一貫、ならびにうけたまわる。

伯 耆 ぼう

佐 渡 ぼうとう

熱 原

もの

おんこころ

はわき房・さど房等のこと、あつわらの者どもの御心ざ

いたいどうしん

ばんじ

じよう

どうたいいしん

しよじかな

し、異体同心なれば万事を成じ、同体異心なれば諸事叶う

もう

げてんさんぜんよかん

さだ

そうろう

いん

ことなしと申すことは、外典三千余巻に定まって候。殷の

ちゆうおう

しちじゆうまんき

どうたいいしん

戦

負

紂王は、七十万騎なれども、同体異心なればいくさにまけ

しゆう

ぶおう

はっぴやくにん

いたいどうしん

ぬ。周の武王は、八百人なれども、異体同心なればかち

ひとり

こころ

ふた

こころ

こころ

違

ぬ。一人の心なれども、二つの心あれば、その心たがい

じよう

ひやくにんせんにん

ひと ころ

て成ずることなし。百人千人なれども、一つ心なれば、

かなら こと

じよう

にほんこく

ひとびと

たにん

たいどういしん

必ず事を成ず。日本国の人々は、多人なれども、体同異心

しよじじよう

難

にちれん

いちるい

いたいどうしん

なれば、諸事成ぜんことかたし。日蓮が一類は、異体同心

ひとびと

そちら

だいじ

じよう

いちじよう

なれば、人々すくなく候えども、大事を成じて一定

ほけきよう

広

おぼ

そうろう

あく

おお

いちぜん

勝

法華経ひろまりなんと覚え候。悪は多けれども、一善にか

たと

おお

ひ

いっすい

消

つことなし。譬えば、多くの火あつまれども、一水にはきえ

いちもん

ぬ。この一門も、またかくのごとし。

うえ

きへん

たねん

積

ほうこうほけきよう

篤

その上、貴辺は、多年としつもりて奉公法華経にあつく

うえ

こんど

勝

おんころ

み

たも

おわする上、今度はいかにもすぐれて御心ざし見えさせ給

由

ひとびと

もう

そうろう

もう

そうろう

いちいち

うよし、人々も申し候、またかれらも申し候。一々に

うけたまわ

にってん

だいじん

もう

あ

そうろう

承 っ て、日天にも大神にも申し上げて候ぞ。

おんふみ

ごへんじもう

そうら

御文はいそぎ御返事申すべく候いつれども、たしかなる

便 宜 そうら

もう

そうら

弁 阿 闍 梨

びんぎ候わで、いままで申し候わず。べんあざりがびん

恩

々

書

敢

そうら

おのおの

ぎ、あまりそうそうにてかきあえず候いき。さては、各々

年

思

蒙 古

としのころいかんがとおぼしつるもうこのこと、すでに

近

そうら

わ くに

亡

浅

ちかづきて候か。我が国のほろびんことはあさましけれ

虚

にほんこく

ひとびと

ども、これだにもそら事になるならば、日本国の人々いよ

ほけきよう

ぼう

ばんにんむけんじごく

お

彼

いよ法華経を謗じて、万人無間地獄に墮つべし。かれだに

強

くに

亡

ほうぼう

薄

たと

もつよるならば、国はほろぶとも謗法はうすくなりなん。譬

きゆうじ

病

癒

しんじ

ひと

治

えば、灸治をしてやまいをいやし、針治にて人をなおすが

とうじ

歎

のち

よろこ

ごとし。当時はなげくとも、後は悦びなり。

にちれん

ほげきよう

おんつか

にほん こく

ひとびと

だいぞくおう

日蓮は法華経の御使い、日本国の人々は大族王の

いちえんぶだい

ぶつぼう

うしな

もうここく

せつせん

げおう

一閻浮提の仏法を失いしがごとし。蒙古国は雪山の下王の

てん

おんつか

ほげきよう

ぎようじや

怨

ひとびと

ごとし。天の御使いとして、法華経の行者をあだむ人々を

ぼつ

げんしん

かいげ

起

罰せらるるか。また現身に改悔をおこしてあるならば、

あじやせおう

ほとけ

き

びやくらい

息

しじゆうねん

いのち

述

阿闍世王の仏に帰して白癩をやめ、四十年の寿をのべ、

むこん

しん

もう

くらい

登

げんしん

むしようにん

得

無根の信と申す位にのぼりて、現身に無生忍をえたりしが

きようきようきんげん
ごとし。恐々謹言。

はちがつむいか

八月六日

にちれん
日蓮

かおう
花押